

シノドス・ともに歩むために

贈物を活かし合う共同体

シノドス・シノダリティとは

毎週の日曜日に小教区を訪問しています。ミサの後、教会に来られた皆さんと懇談会を持つようになっています。教会によって違いますが、時々とても活発な話し合いになります。あるときにこういうことを質問された。「教会に民主主義がありますか」。出来るだけ丁寧に説明してみたのですが、最後に「教会で政治の世界で言われているような民主主義がありません。教会の事柄の決め方の基準は、『多数決』ではなく、『識別』だ」と申し上げた。

「シノダリティ」とは、こういう「識別」のプロセスを現わしているが、これだけではない。もっと深い意味を持っています。教会のアイデンティティ、教会の在り方を表明しています。

教会は、イエス・キリストに導かれ、聖霊に支えられて、御父が示しておられる目的地に向かって歩んでいる神の民です。第二バチカン公会議の教会憲章の二章は、「神の民について」教えています。「シノダリティ」ということばは、教会の本質を現わしています。

「神の民」である以上、皆がそのメンバーとして同じ旅人です。イエスに従う弟子として皆が神に招かれた者です。同じ洗礼を受けて、同じように全世界に神の国の福音を証しし、告げるために派遣された者です。主の食卓を囲んでイエスが与えてくださった命のパンに支えられて共に歩いて行きます。一人ひとりが与えられた役割が違いますが、皆が「キリスト者」です。シノダリティの基本はここにあります。こういうところから理解しないと、シノダリティは、単なる方法論になってしまう危険性があります。シノダリティということばを通して教会の在り方が表明されています。

この「神の民」は、神の国の実現に向かって歩みます。「ともに」歩みます(SYN-ODOS)。イエスに導かれて進んで行きます。道に遭遇するさまざまな出来事を思いめぐらし、また、出会う人々に心を開きながら、神が示してくださる方向を識別します。

歩むときに疲れます。また、さまざまな困難に直面します。不安になるときもあります。どちらの方向へ曲がるべきかに戸惑い、目的地を見失う時もあります。また、ともに歩む仲間のペースに自分のペースを併せるのも簡単ではありません。皆がお互いに支え合うことがどうしても必要です。ともに歩むことを学ぶ必要があります。イエスに導かれて、歩む弟子たちの共同体を見つめながら、学ぶのです。

歩みながら多くの人々との出会いによって、励まされるときがあれば、厳しく問われるときもあります。違った宗教、さまざまな文化の中で生きている人々との出会いから学ぶことが山ほどあります。歩みながら、「神の民」として成長していくはずです。

そして、道端に倒れている人にも出会うのです。わたしたちのたてた企画・スケジュールは崩れてしまうと心配することもあるかも知れません。ただ、通り過ぎるとわたしたちを導いてくださるイエスから離れてしまいます。迷子になって、目的地にたどり着くのは不可能になります。

神の民は、共に歩みながら信仰を深め、交わりの体験を確かなものとし、すべての人々にわたしたちが与えられた福音を告げます。シノダリティの中にこのような様子が含まれています。

シノダリティは、この神の民の「信仰の感覚」と「福音宣教に対する共同責任」を具体的に示すものです。教会の基本的なところでは、(第二バチカン公会議の教会憲章の12条、「福音の喜び」120)。

教会の兄弟姉妹は、それぞれ与えられた召し出しによって、シノダリティの実現に貢献します。ただ、司教・教皇が与えられている使命もあります。国際神学委員会の文書の中でそれはこういう表現で説明されています。「識別」は神の民全体の責任であり、最終的な決定は司教の責任です。“Decision making”と“decision taking”の区別です。教区の場合は司教の使命は、また、教会全体の場合は教皇の使命は、行われた識別が福音や教会の伝統に根ざしたものであることを承認することです。神の民全体の歩みと司教たちの与えられた使命の調和は、シノダリティの実現のために欠かせない課題です。真剣な傾聴と様々な執着から解放された心が必要です。たえざる回心が必要です。

第16回通常シノダスの歩み

今回招集された第16回通常シノダスのテーマは、「共に歩む教会のため～交わり、参加、そして宣教」です。このシノダスの会議は、2023年の10月にローマで開かれる予定です。

普通はシノダスの会議の期間は三週間ですが、その前に様々な準備が行われます。世界の各司教団や他のグループの意見を基にして、審議の土台となる草案が作られます。シノダスでこの草案に基づいて議論され、結果として教皇様にいくつかの提案が提出されます。その後、教皇様はそれらを参考にして「使徒的勧告」といわれる文書を発表されます(例えば、「福音の喜び」、「愛の喜び」などです)。場合によっては、特に最近のシノダスは、声明文をも発表します。それを受けて全世界の各教区は自分の歩みを振り返り、出された指針を取り入れて刷新を目指します。

しかし、第16回通常シノダスは、今までのシノダスと違うところがあります。教皇様の御意向を受けて、二年間の道のりが企画されていました。ただ、今回、それは「準備」としてではなく、「シノダスそのもの一部」として定められたのです。これはとても大きな違いです。教会のすべての信徒、修道者、司祭、司教は、ともに歩みながら、「ともに歩む教会のため。交わり、参加、宣教」というシノダスのテーマについて話し合いをもつように求められました。皆がシノダスに参加しています。2年間の歩みを通して、ただ「ともに歩む教会」について話し合うだけではなく、実際にこの教会の在り方を具体的に体験する狙いがありました。ですから、シノダスの歩みの間に、それを確認する必要があります。大阪教区でも、それを体験しただろうと思います。

実際に第 16 回通常シノドスの歩みは、2021 年 10 月 10 日にローマの聖ピエトロ大聖堂において開催されました。教皇フランシスコは、開催ミサの説教の中でシノドスのテーマに触れ、シノドスの歩みの大事な三つのステップを示めされました。**出会うこと、聞くこと、識別すること。**

出会うこと。まず、神様との出会いに心を開く必要があります。それによってわたしたちの心が清められ、人々との本当の出会いを妨げる様々な執着から解放されます。そして、教会共同体の中での出会い、また、毎日関わる多くの人々との出会いを大事にすることは、シノドスの成功のための大前提になります。

聞くこと。真剣に関わって、耳を傾けるときに聞こえてくるのは、人々の心から生まれてくる叫びです。その中にわたしたちに語り掛ける神様の声が聞こえてくるはずですが。イエスのように、裁くことなく、開かれた心で聴くことは、シノドスの歩みが実を結ぶための条件です

識別すること。シノドスは、立派な文書を書き上げるためのものではありません。シノドスは、神様が現在、教会共同体と一人ひとりのキリスト者に何を求めておられるかを見極め、それに応える道を探す歩みです。それは、信徒、修道者、司祭、司教は、同じ聖霊に導かれて共に歩む大切な道のりです。

開会ミサの前の日に、シノドスの開会式が行われました。何人かの信徒、修道者、司祭や司教の証言を聞いてから、教皇様がシノドスの目的と意味について説明をなさいました。

シノドスは、議会でなければ、シンポジウムでもないと教皇様が強調されました。シノドスは、聖霊とみことばに導かれて、現代における天の父の望みを「ともに」識別し、それに忠実に応える道を探す歩みであると述べられたのです。そして、よい識別するために、教皇様は避けるべき誘惑にも触れたのです。それは「**形式主義**」、「**主知主義**」、「**固定主義**」であると指摘されました。

「**形式主義**」とは、聖堂の外見の美しさを見るが中に入らないようなものである。形や組織の運営にとどまってしまう誘惑です。

「**主知主義**」とは、抽象的な話に時間を費やしてしまって立派な文章ができるが自分も教会共同体も変わらないという誘惑です。

「**固定主義**」とは、「今までこうだったから」という理由で新しい試みに踏み込まない誘惑です。

これら乗り越えてすべてのカトリック信者(信徒、修道者、司祭、司教)は、互いに耳と心を向き合いながら、天の父が現代においてわたしたちに何を求めておられるかを見極めていくはずですが。ともに歩む美しさと厳しさを味わいながら、教会の本当の在り方に目覚めていくことは、このシノドスの一つの大事な目的です。教会は共に歩む共同体です:キリストと共に、教会の兄弟姉妹とともに、すべての人々とともに。実際に、シノドスの歩みを通して、教会の在り方を学びます。

日本の教会も、1987 年に行われた「福音宣教推進全国会議」(NICE・1)の歩みを通して、同じような体験をしました。当時の教会の活性化につながったことを、皆さんも覚えているでしょう。

シドスの歩みの中で欠かされない大切なこと

シドスの歩みは、「ともに歩む」体験になるために必要とされる大切なことがいくつかあります。

1. シドスの歩みは信仰の歩みです。従って、祈りのうちに歩まなければならない道です。みことばに耳と心を傾けて、聖霊の導きを素直に受け止める。シドスは単なる「会議」ではありません。天の父の教会に対する望みを見極め、それに応える道を探ることです。

2. 振り返りと分かち合いの大切さ。シドスの歩みの中心は、議論ではなく**振り返りと分かち合い**であり、そこから生じてくる**気づき**です。従って、聴く姿勢が大事です。それと同時に、謙虚に自分のイエスとの出会いを通して与えられた恵み、信仰を生きる中で感じている喜びと困難、教会共同体に対する希望や不満等について正直に分かち合うことがとても大事です。生活から出発しなければならないのです。お互いに耳と心を向き合いながら、「ともに歩む教会」を体験していきます。聖霊に導かれて、この分かち合いを繰り返し深めていく中で、「共に歩む教会」は実現されていきます。

3. 現実に目向けて、人々の叫びと大地の叫びを心に留める。2020年10月4日に教皇フランシスコが発表された「兄弟の皆さん」の回勅はヒントを与えてくれます。教皇は世界に目を向けられます。多くの人々の努力にもかかわらず、人類の夢とその実現が裏切られた現実に触れています。グローバル化された世界は、本当に兄弟愛を前進させているのでしょうかと教皇は問いかけます。人類に影を落とす色々な課題を指摘しておられます。例えば、切り捨て文化、人権の実現における不公平など、貧富の格差の増加、武器開発の競争、難民移住者が置かれている非人間的な状況、コミュニケーションの危機等です。しかし、それは単なる社会分析ではありません。聞こえてくる多くの人々の叫びを痛くなるほど感じておられる教皇の心が伝わります。大地の叫びもそうです。わたしに、わたしたちに、何が聞こえてくるのでしょうか。「ともに」社会に目を向ける必要があります。

しかし、教皇は、希望を抱かせてくれるいくつかの点も強調されます。旧約聖書の中で伝えられている預言者たちの活動にも見られる現象です。預言者たちは、痛みを感じながら多くの不正を訴えますが、神の心を知っているからこそ、預言者の最後のことばはいつも希望を抱かせることばです。教皇も、希望へ心の扉を開くように呼び掛け、希望を与えてくれる現実に目を向けます。イエスは「ともに」いてくださいます。

現実をイエスの目で見、その中で生きている人々とイエスの心で関わる時に、初めて「人々とともに歩む教会」になることが可能です。教会の壁を越えたシノダリティを生きるように呼ばれています。

ともに歩む共同体

1. みことばに耳を傾けて

▶ エフェソの教会への手紙 4・1-13

- 教会共同体の姿をきれいに描くパウロのことばです。
 - ✓ 体はひとつ
目に見える一致
 - ✓ 霊はひとつ
一致の土台
 - ✓ 希望はひとつ
同じ希望に支えられて共に歩む
 - ✓ 主は一人
イエスの弟子であることは基本的なアイデンティティ
 - ✓ 信仰はひとつ
共に、イエスが主であると告白し、聖霊によって神を父と呼ぶことのできる兄弟姉妹
 - ✓ 洗礼はひとつ
同じように召されて、同じようにイエスについて行くための恵みをいただいた兄弟姉妹。
 - ✓ 父である神は唯一
皆は同じ天の父の子供です。
- この共同体の成長を願って、また、共同体に委ねられた使命を果たせるように、一人一人がそれぞれの賜物を受けている。預言者、福音宣教者、教師、牧者などです。
- この賜物は、与えられたものとして謙虚に受け止め、皆のために用いるべきものです。

2. それぞれの召し出しと使命を生きる

教皇聖ヨハネ・パウロ二世は、使徒的勧告「奉獻生活」にこのように述べておられます。

キリスト者の生活の一体性の中で、多様な召命は、「教会の面上に輝く」キリストのただ一つの光が放つ幾条もの光線に似ています。

信徒の召命は世にあるという特徴を帯びているため、みことばが世界のアルファとオメガであり、あらゆる被造物が持つ価値のよりどころであり尺度であるという点において、彼らは受肉したみことばの秘儀を表します。

一方、聖職者は、栄光のうちに来るキリストの再臨を待ち望みながら、「すでに、しかしまだ」というときの流れの中で自らの民を導く頭であり牧者であるキリストの似姿を生きることを、自らの役割としています。

奉獻生活には、受肉した神の子は、すべてのものが向かう終末的な目的地であることを、その前では他の光がすべて色あせてしまう輝きであること、そしてただ一つ完全な人間の心を満たすことの出来る無限の美しさであることを示すという務めがあります。(奉獻生活 16 条)。

確かに、キリスト者一人ひとりが与えられている召命と役割をより深く認識する必要があります。それによって教会共同体が成り立ち、その使命を果たすことが出来ます。その中で**信徒の使命**は、特に家庭と社会において果たされるはずで、共同体に対する奉仕を担う信徒も当然必要ですが、教会内のことに力を注ぎすぎると教会の福音宣教の働きは弱くなります。それぞれの使命をもっているキリスト者は、ともに集い、福音の光に導かれて識別するときこそ、教会として歩むべき道が見えてきます。すべての召し出しは神からの賜物であり、教会のために必要です。

3. 与えられた召し出しと使命を分かち合いながら、ともに歩む

シノドスのプロセスを通して、「共に歩む」ことの美しさと難しさを体験しました。とても大事な学びです。

ただ、具体的にこの歩みを確かなものにするために、教会は様々な指針を出しています。教区にある「宣教司牧評議会」、各小教区の「評議会」、様々な委員会等です。これらの組織を通して「ともに歩む」ことは実現されるはずで、その基本的な性格は、教会法で決められていますが、各教区は、それぞれの状況に併せて適用するはずで、

ただその働きを福音的なことにするために、先に申し上げたシノドスの歩みについての教皇フランシスコの指摘を心に留めておく必要があります。

それに加えて、福岡教区の「宣教司牧方針」を作り上げていく中でわたしたちが気づいたいくつかの点を分かち合ってみたいと思います。

(1) 現実の中で信仰を振り返り、教会の在り方を見直すことの大切さ

「生活を通して育てられる信仰」「社会と共に歩む教会」を作り上げていくためには、信徒、修道者、司祭。司教が共に話し合い、それぞれの体験を分かち合うことは欠かせません。

その際に「キリスト者は～しなければならない」という掟中心の思いから離れ、「私はこのように感じています」「このような喜びを与えられます」「このような困難に直面しています」という、実生活の体験を分かち合うことが大事です。それによって、様々な気づきが生まれると同時に、お互いを知る事にもつながるからです。

(2) 小教区におけるリーダーシップの大切さ

ある教会では、司祭や担当者の指導のもとで、豊かな分かち合いが出来ました。その一方で、何人か

がアンケートを渡されて回答するように頼まれただけのところもありました。話し合いながら課題を考えることによって、一人ひとりが信仰を生きるように励まされ、教会共同体の繋がりが深まります。「司祭が」「信徒が」中心となるのではなく、キリストに耳を傾ける共同体に必要なリーダーシップの在り方を模索していく必要があります。

「共に歩むこと」の大切さは認識されていますが、現実として何かを決定する際、強い意見を持つ人の声が届きやすい状況があります。また、教会から離れている人、離れざるを得なかった人にも、真摯に耳を傾けることを小教区共同体は忘れてはいけません。

(3) 識別の基準の明確化

どこから現実を見るか、どこに焦点を当てて物事を考えるか、誰を中心に社会の様々な課題を受け止めるか、識別の基準を明らかにする必要があります。それは言うまでもなく「福音」に導かれた識別です。その歩みのために「祈り」が必要です。私たちが求めているのは、「神の国」の実現だからです。「宣教司牧方針」で行われたアンケートは、単なる意見を集める作業ではありませんでした。イエスのまなざしで現実を見、イエスの心でその現実の中で生きている人々と関わる時に見えてくるもの、感じること、行おうと思うこと、変える必要があることなどを明らかにしていくことが大切です。そこから、具体的な提案が生じてきます。このような過程を経ることが、一人ひとりの信仰生活や、教会の在り方を見直すことに繋がり、キリスト者として成長し、イエスが求める共同体に成長していくのです。

(4) 教会として与えられた使命の再認識

教会は、神の愛のしるしとして存在し、その愛を全人類に表したイエスの福音を伝える使命を与えられています。「教会」という枠を乗り越えて、周りの世界に目を向けるように呼び掛けられています。神の愛に飢えているのは誰か。神に愛されている者としての尊厳が踏みにじられている人々は誰か。共に生きていくために神から与えられた自然を大切にしているか。イエスに出会ったものとして、私たちは、様々な状況から聞こえてくる叫びを心に留め、どのように応えていくか識別するように求められています。この識別から生まれてくる指針や提案を、神の呼びかけとして受け止め、自分のできる範囲で実行するように努めます。社会に開かれた教会の基礎はここにあります。

4. 最後に、また、みことばに耳を傾ける

「さて、過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」(ヨハネ 13・1)。

「イエスは、食事の席から立ち上がって上着を脱ぎ、手ぬぐいを取って腰にまとわれた。それから、たらいに水をくんで弟子たちの足を洗い、腰にまとった手ぬぐいでふき始められた」(ヨハネ 13・4-5)。

「さて、イエスは、弟子たちの足を洗ってしまうと、上着を着て、再び席に着いて言われた。『わたしがあなたがたにしたことが分かるか。あなたがたは、わたしを「先生」とか「主」とか呼ぶ。そのように言うのは正しい。わたしはそうである。ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない』(ヨハネ 13・12-14)。

最後の晩餐の中で、イエスは弟子たちに「新しい掟」を与えられました。イエスは、それを御自分の掟と名付けています。「私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」。「この上なく」弟子たちを愛し抜かれたイエスは、彼らに同じように互いに愛し合うように招きます。

最後の晩餐の初めにイエスは、具体的なしるしを通して、この愛を示されたのです。弟子たち一人一人の足を洗いました。弟子たちの心に深く刻まれた出来事です。ヨハネは、それを詳しく記録しています。イエスは、席を立ち、上着を脱ぎ、手ぬぐいを腰にまとい、水を汲んで、弟子の足を洗い、手ぬぐいでふきます。終わってから、弟子たちも互いに足を洗い合わなければならないと言われます。そのとき、弟子たちは完全にそれが分からなかったかもしれませんが、後になって、自分たちの前にひざまずいて、足を洗ったイエスが、十字架の上で一人一人のためにいのちをささげたイエスであると悟ったのでしょう。彼らの考えを超えた愛のしるしでした。

この出来事の中に、イエスに従う者の生き方が示されています。共同体において、互いに奉仕し合いながら歩くことこそ、主が望まれる共同体の基本です。そして、社会において、キリスト者は、また、教会は、一人ひとりの人間の前に、人類の前に、ひざまずいて足を洗うように招かれています。愛の道は、これです。わたしたちが「ともに歩みながら」目指す教会は、この愛の掟を生きる教会です。

振り返りと分かち合いのために

1. シノドスの歩みの中であなたはどんな気づきがありましたか
2. 「ともに歩む教会」になりために、
 - 何が助けになるか
 - 何が妨げになるか
3. あなた自身が、また、あなたの小教区は、誰とともに歩んでいますか
4. 教区や小教区の兄弟姉妹とともに歩みながら、
 - どんな時に喜びと希望を感じますか
 - どんな時に絶望を感じますか
5. あなたが望んでいる教会は、どんな教会でしょうか。